國際理解のための教育

——對立と危機——

名倉英三郎

人間がつねに望んでいることは、個人の自由と平等、社會正義、世界平和の實現されることである。またこれらに對する欲求は、人間の存在と生活との根據でもある。これらは相互關連的なものであつて、いづれが缺けても他の實現は不可能であるし、人間の生の條件は滿たされることがない。人間の理想の追求とは、要するにこれらが一體となつて實現されてゆく過程なのである。

人間の理想、すなわち人間の基本的權利、社會の秩序、人類の幸福は、いまだ現實のものとはなつていない。しかも世界は平和とは全く反對の方向を辿ろうとしている。人間の課題も社會の問題も未解決であるが故に、世界もまた未完成であるのは當然の歸結であるともいえよう。しかし今日の世界は、人間や社會の發達を阻んでいるだけではなく、それらを破滅に陷れようとしているのである。現代の人間の關心は、自己や地域社會について拂われると同じに、またそれ以上に世界に注がれている。それは人間生活が世界的な關連のなかで營まれていること、個人が世界的な展がりのなかに生きていることの自覺がもたれるようになつたため、また世界的秩序の不安定や崩壞が人間の生そのものを危殆に頻せしめること、人間存在の意味を喪わせるであろうことを直觀しているからである。戰爭が終結しても平和は實現することなく、苦難と混亂の狀態が續き、そのなかで再び戰爭の危機が釀成されてゆくことを知つているからである。人間は幸福を希い、不安に怯えるが故に世界とその平和の問題に關心を抱かざるをえないのである。

今日の世界の狀態は、戰爭によつて平和が實現されると

か、戰爭は平和の前段階であるとかいう言葉の當て嵌るものではない。戰爭は更に戰爭を產み、一層大きな破壞のための力を用意する。平和とは單に戰鬪行爲が行われていない狀態を指すだけであつて、その蔭では武力は一層尖銳化され强力化されている。平和とは次の戰鬪のための準備期間であるといわなければならないようである。世界の不安定な狀態が、絕えず交互に增强されつつあるいくつかの武力によつて支えられているにすぎない。世界が利害を異にするさまざまな國家によつて構成されている以上、自國の利益だけを求めようとする國家と國家との對立は避けられないことである。またその利益を保障する力は國家內で養成されていなければならない。それ故國家間の利害の對立は、直ちに力と力との鬪爭に轉ずる。人も國家も戰いに勝つことを欲する。勝利者となるためには、力は養われ蓄えられていなければならない。このことが人間の幸福を妨げ、幸福を實現するために役立たせなければならない力を不幸の原因とさせているのである。

それでは力を否定し、武器を放棄すれば鬪爭を避け、平和を實現することができるであろうか。すべての國家が力や力を象徵する武器を持たなくなつたとしても、イデオロギーの對立はなお殘るに違いない。國家・地域の經濟事情の心的表現であるイデオロギーは、國家・地域の經濟上の利害が異り對立するかぎり形なき武器となつて世界を攪亂し、分裂させる。たとえ人類が普遍な人間性を共通にしているとしても、發生と展開の歷史的地理的條件を異にする國民性・民族性は、武力以上に排他的である。しかもイデオロギーとイデオロギーとの對立は、イデオロギーによつて解決されない。精神的にも物質的にも全く異つた條件の上に發展したイデオロギーは、對立したままの狀態を繼續させる。そしてその狀態が激化し、解決の見透しがえらなければ他の力を借りなければならなくなるであろう。もし物質的な力が否定されたとしても、限定された精神的力である國民性・民族性が相對的なものであるかぎり、鬪爭はなくならないし、またイデオロギーに原因し、それによる戰いは、武力による戰い以上に深刻であり、凄慘である。

世界は安定感と安全感とを缺いているとともに、恐怖と不安とに滿ちている。平和であつて平和でない狀態が續いている。この狀態は、この狀態から脫れ出よう、あるいは利用しようとする國家に戰爭への衝動と動機とを與える。たとえ國家が意識的ではないにしても、結局は戰爭を手段として採らざるをえないという結果に導く。しかも今後の戰爭に使用される武器の巨大な破壞力は、人類の破滅を豫

告しているようである。この破壞力とそれに原因する恐怖心すなわち人間の生への執着とが、今後の平和への可能性を辛うじて支えているかのようである。

一、

科學と技術との發達は、人間の生活空間を世界にまで擴げ、時間的距離を極度に短縮した。いかなる地域における生活も、政治的な境界線によつて隔てられてはいても、他のあらゆる地域と直接にも間接にも、文化面のあるいは經濟上の交流・交渉なしには營むことができなくなつてきた。生活樣式の變化やその內容の向上も、他との接觸と他からの攝取とによるものであつた。計畫的なあるいは無意識的な接觸が、生活の基底・背景を擴大した。生活領域の擴大は、遠く隔てられた地域に住むひとびとの所有や欲求を共通ならしめた。科學・技術は、人間が普遍性の所有者であることを實證し、また異つた地域のひとびとを接近させ、相互に理解し合う可能性のあることを敎えた。現在の生活の安定と將來の發展は、國家間の相互の依存關係を前提としており、またその關係を進めてゆくためには相互の理解が必要なことは明らかなことである。コミュニケイションの發達は、この要求に應ずるために役立たなければならない筈である。

生產と交通との發達は、國家が孤立することを許さなくなつた。自己の繁榮のためには他からの援助がなければならないし、また自己の發展は他の發展のために役立つている。生活も文化の發達も、他との關連において可能である。それぞれの國家は他との關係をもちながら世界を構成し、そのなかにおいてはじめて存在することが可能である。國家は世界を否定することも、他の諸國家を無視することもできないし、またこれを否定するならば自らが存續することはできなくなる。要するに世界は諸國家の同時存在と相互關連とによつて成り立ち、國家は世界內での相互扶助によつて存立することができるのである。人間が世界・國家のなかで生き、自己の目的を實現しようとするならば、國家間の理解と協調と交流が圖られなければならない。このことのためには世界の平和が維持されていなければならない。人間が欲する世界の平和は、目的であるとともにそのための前提でもある。

いつの時代にも國家によつて世界が自覺されたときには、平和によつてえようとするものやそれを實現するための手段には相違があつたけれども、世界の平和を實現しよう維持しようとする計畫が建てられ、そのための努力が拂われてきたのである。しかし平和はいつも破られて、混亂

と不安があとに續いた。そして空しくなつた平和を取り戻すために再び平和のための努力が拂われてきた。平和を實現する可能性は、そのための計畫や努力が繰り返されることによつて增大するものではない。他の繁榮が自國の貧困の原因であると考えられたり、他の存在を許そうとしないならば、獨善主義と排他主義とが國家の方針を決定し、戰爭が平和のための手段として認められることになる。力が自國の權益や自由を保障するための手段として諸國家によつて共通に認められているかぎり、平和は力によつて破られるであろう。また力が容認されているかぎり、平和とは力と力との均衡の上に成り立つと考えられ續けるであろう。しかし、力によつて獲られたものは力によつて奪われる。それ故、奪われまいとするためには力によつて他の力から護らなければならない。力は衰えるものであるけれども、滅ぶものではない。力はつねに新しい力を產み出す。力の上に築かれた平和は力によつて破られる平和である。

だが戰爭は國家勢力の均衡を變えようとする力と、現狀を維持し續けようとする力とが、各々の主張を貫こうとするところに起るのであつて、破壞することだけを目的として戰われることはない。どんなに烈しい戰いの間でも、平和は忘れられてはいない。今日でも世界に起つたさまざまな困難を解決して、平和への道を見出そうとするいろいろな對策が構じられている。

世界內に存する矛盾や對立の原因をそのまま究極まで押し進めて、その究極において自己の主張を承服させようとするものがある。もしその主張を容認しないならば、イデオロギーを支えている力によつて仕遂げようとする。しかしその主張は、個人と世界とを直接結びつけようとするために、世界が國家によつて組織されている現段階においては、かえつて國家間に紛爭と不安とを招いているにすぎない。また人類の絕對の自由と平等とを目指しているにしても、それを實現するために現在の自由が奪われ平等が害われている。自由を獲得するために自由を犧牲にするとか、平等を達成するために不平等な社會のあることを許すとかいう考え方は、人間を手段として見るものである。

個人の自由な意思にもとづいて形成され經營されている國家においては、國家の危殆がそのまま個人の危機として把えられる。もし自由の發展を妨げるものと衝き當つたならば、國家も個人も自由を守るために戰わざるをえないであろう。もし國家において力による以外に自由な意思を守る方法がないということがひとびとに信じられ、力が肯定

されるならば、國家が力を保持すること、增强することが承認される。このことはこの力に對抗しようとする他の力を大きくする原因となつて、世界の不均衡を一層ひどいものにする。力を肯定する自由は、その國家と國民との自由ではあつても、他の國家や他民族の自由とは對立するものであり、まして世界の自由と平和とを妨げるものである。

國家あるいは住民の意思の自由な實現を目的とするものに國家主義や民族主義がある。これらは國家や民族の世界内においての利害の對立から形成されるものであるから、自國の繁榮のために秩序ある世界が實現されることを望みながら、また國際的な交渉の必要を認めながら、國家間の障壁を高くし内に閉じ籠ろうとして排他的である。それらは國家・民族の自然的條件や、風土に培われた歴史や傳統によつて彩られているために、同一のものでもなければ一致することもなく、根深い矛盾を露呈したまま主張される。コミュニケイションは、あらゆる異つた地域の住民の文明を近似させることはできたが、精神的な背景を塗り替えることはできない。しかもコミュニケイションの發達は、いろいろな地域に住む人間が同じものを必要とするようにしてしまつた。欲するものが同じであり、しかもその量に限度があるならば、そのものに對する要求度は一層昂められる。もしそれを所有することが國家の原理・民族の神話によつて要請されるのであるならば、原理・神話は正しいものであるが故に、所有者・競爭者は犧牲となるべきものと見做されよう。國家主義・民族主義は平衡な對立をもち續けることはできない。對立によつて生れたものは、なかに鬪爭を孕んでいる。國家・民族の繁榮が世界内において、他の國家との關連によつて爲し遂げられることが認識されているにしても、その認識をもつたということは、直ちに世界の平和を要請することであるとはいえない。ただ平和であることを、比較的に希望するだけのことである。

力にもとづいたいかなる方法も、世界の平和を實現することはできないもののようである。それでは、何らの力をも前提としない、力を伴わない方法は、それに替ることができるであろうか。

國際的な知的交流は、國家間の相互の理解と同情と共感とを高め、すべてのひとびとの世界的な視野を廣め、國際的な協調と相互の扶助の必要を識らせることに役立つた。經濟上の交流は、餘剩が缺乏を補い、あらゆる地域の生活を豐醇にし向上させた。豐かな生活と高められた知性は、自由と秩序と平和とを約束するかのようである。しかしそれらは、實現の可能性を豫想させ、希望を抱かせるもので

はあつても、必ずしもその保證を與えるものではない。

國家の自發的な參加に依存する國際的な機構は、國家がそれを拒否するならば、その國家との交流を圖ることはできない。國際的な機構は强制力をもたないかぎり、その目的を達成することは極めて六か敷い。またその機構のなかでもつねに相互の理解が進められ、その成果を擧げることができるとは限らない。國家間に横わる政治的・思想的な障壁が相互の疎通を妨げているので、取り除かれ是正されなければならなかつた筈の國家間の誤解や偏見が、相手を知ることによつて一層增長される。また自國の隆盛と繁榮を企圖する國家は、國際的な知識によつて自己の實力を測り、他國の富と力と弱點とを探知しようとする。小さな對立も僅かな喰違いも裏面の事情を知るものは重大なものに伸展させることができる。解決されうる困難も解消しなければならない對立も、逆に國家間の和親を害う決定的な理由とされる。そうなると國際的な交流・相互の理解は、次の侵略と攻擊のための準備に役立つものになるという結果をきたす。諸國家が相互に理解しあうことは、たしかに國際的協調を促進するために役立つに相違ないが、國家經濟を世界との繫りのなかで經營しながら、國家の政治においては孤立化を圖ろうとする傾向がなお存するとき、かえつて國家間に不和と紛爭を生じさせる隙を與えることになる。

國際的な理解を圖るための機構は、良心と善意と信頼と同情とを前提として組織されるので、國際的な理解が促進されることを妨げるものがあつても、それを直接に効果的に排除する手段も制裁を加える力ももつていない。それは暴力の前には爲すべき方法をもたず、全く無力なものであるように見える。

しかし國際的な理解のための機構が强制力をもたないということは、國際的な理解の意義を否定したり、そのための機構を貶したりするものではない。かえつて無力であるからこそ、個人の自由と平等、社會の秩序と正義、世界の平和と共同の福祉を希求するものは、その實現を念願し支持しなければならないのである。國家は國際的な理解と世界的な視野をもつことによつて、世界における自國の立場と役割を識るであろうし、人間も國家も自分たちの求めている究極のものは平和であるということを知るであろうし、また國家の眞の繁榮は世界のなかで他と關連をもつことによつてはじめて可能であつて、世界的關連性は國家の自主性を犯すとか存立を危くするとかするものではないということを認めるであろう。

現實が急轉換し、國際情勢が緊迫するときに、國際的な

理解を介して世界の平和を築こうとすることは、迂遠な手段であるように考えられるし、またこれまでに失敗したことを重ねて繰り返すにすぎないと思われる。現在の問題を解決することができるものは、今後の對立の原因となるもののすべてを破摧することのできる科學の力より他にはないと見られる。

しかしわれわれは現狀に絶望することも、それから逃避することも、殊更に目を覆うこともできない。また自分だけの安逸に滿足して傍觀者となつていることも、力を悖んで樂觀することも許されない。まして現在もたれている以上の破壞力に賴るのであつてはならない。國際的な理解による方法は、當面の困難の根本的な解決策を直ぐに見出すものではないが、少くとも現狀を惡化させることなく、また現在を原因とする將來の問題の解決がより困難になることを防止することはできよう。

國際的な理解が世界の平和を實現するための前提であるとするならば、現在において世界の平和のための努力や國際的な理解の可能性を阻んでいるものは何か、とくに人の心のなかに築かれている目に見えない障碍物は何かということ、またそれは世界に不安や恐怖を撒き散らすものでもあるから、その原因となつているものとが分析されなければならない。遂げようとする人間の願いの行く手に邪魔をしているものが何であるかを明らかにすることによつて、國際的な理解を促進する方法が見出されうるのではなかろうか。

二、

國家も民族もそれぞれの風土と傳統とによつて培われた文化をもつている。生活の技術、思惟の形式は、ひとびとの現實のなかで成長し、發展してきた。文化はそれを擔う國民や民族から離れてはありえないものである。土地の條件と住民の價値觀、價値觀も風土によつて限定されるのであるが、それらから產み出された文化は、その文化圈において妥當するものである。ある文化は、異つた條件と價値觀とから生れた文化とは本質的に異つていて、どこまでも獨自なもの・特殊なものである。それ故ある文化と他の文化とは、同一に見ることも、評價することもできないものである。われわれが見出しうるものはただ文化の差違性だけである。ある文化のもつ考え方・見方で、他の文化の本質をありのままに把えることはできない。われわれが他の文化を理解することができるのは、他の文化との間に共通性が存するときであり、かつその共通な領域に關してである。たとえ類似した文化でも、共通性が全領域にわたつて

存するということはないのであるから、他のものを完全に理解することは期待しえないところである。

われわれは異つた文化・思想に接したとき、これまでに習得した方法・慣習ではそれを理解することができないことを感じる。自己の外にあるものとして感じられる。己れのものに對立するものとして他の文化が把えられると、われわれはその對立を克服する、あるいはその對立から逃れるために、否定するとか無視するとか積極的に理解するとかの方法を採る。どのような方法が選ばれるにしても、われわれは自分のもつている方法以外の方法をもたないのであるから、その方法は自己を中心にした自己の方法、主觀的な・獨斷的な方法である。他の規準では測ることのできないものにそれを當て嵌めて秤量するために、そこに質的な誤差、すなわち誤解が生れる。誤解は生活上の利害と結びついて偏見を生みだす。

國家が自國の發展のために國際社會に加わろうとし、また國際的な接觸が擴つてゆくのが必然的な歴史の過程であるかぎり、自他が相互に誤解と偏見とを抱くのは避けられないことである。もし國家・民族が誤解と偏見とそれらにもとづく鬪爭とを怖れて、再び自己のなかに閉ぢ籠ろうとするならば、その運命は世界のなかで陶汰される以外の結末をもたらすことはないし、また現代の國際社會は、國家が孤立することを許しはしない。

他の文化との間に見出される違いは、本來われわれの文化の發展のための契機ではあるけれども、利害關係によつて判斷されるとき自己の自由を阻害するものとして看取される。この喰い違いを調整するためには、自己のもつ自由を制禦・修整するか、あるいは自己のものをそのままにして他のものを制壓・改變するかしなければならない。喰い違いの調整は、文化においては文化のもつ生命力の强弱と、文化を育てた自由の歴史の深淺とを考察することによつて解決の方向を見出すことができよう。

國家は文化を基底として生れ組織されたものである。文化が價値的ではあつても他の文化と利害を爭うものではないのに對して、國家はその住民の欲望を保障するための集團であるところから、利害に敏感であり、利益を害うものを排除しようとする。國内の利害・對外的な利害の調整を行うことが政治であり、國家はその爲事を擔當するものなのである。その上現代の國家は、文化を母胎として生れながら文化を決定する役割をもつようになつて、文化と人間との間に位置するようになり、人間と文化とを統制する原理となつている。それ故文化と文化との間に交流・調整が

可能であつても、國家は他の國家の意志が國家の意思に逆らい、それを損ねるものであるならば、交流も調整も欲しない。もし異つた二つあるいはそれ以上の意思が、自己の意思を遂げようとするならば、當然それらは衝突し、そこには爭いが起る。文化の對立は、文化が國家によつて代表されるとき、國家間の鬪爭という形をとつて表われてくる。

民族は國家よりもより自然的な條件、すなわち共通の土地と血液とを基底にして構成されている。生活體の單位としては、國家が組織される以前に形成された集團ではあるが、今日では國家と均しいものとして考えられよう。しかし民族が國家と相違する點は、國家が文化と民族とにもとづいてつくられる政治的な組織體であるのに、民族はより原始的であり、かつ政治的な性格は第二義的であること、そして文化の母胎であるということである。それ故民族間の對立・抗爭は、利害を超越して戰うので文化を手段として戰う國家間のそれらよりも一層根深く烈しい。國家の成員が最も鞏靱な自然的な紐帶と、政治的な繫索との二重性の下に結集しているので、現代の國家間の對立・抗爭は自然の條件と政治の原理とを原因とするようになり、その樣相はより激烈になり殘虐性を增すようになる。

本來民族は閉鎖的・保守的であるのに對して、國家はそれとは反對の性格をもつている。世界の構成單位であるところの國家が、すでに自己内にこのような矛盾を内藏しているのであるから、世界に漲る不安や恐怖は、世界そのものに原因するのではなくて、國家自體の矛盾とそれから起つた焦燥とによつて生れたものであるといわなければならない。それが國家間の關係に投映し、對立を惹き起し、世界を混亂と不安とに陷れるのである。

國家はひきつけようとする力と排除しようとする力とをもつており、これらの二つの力は、同一面において同時的に働いている。二つの力のいづれが强いか弱いかは、その國家の成立過程がいかなるものであつたかによつて決つてくる。また力の强弱がその國家・文化の性格や特徵をつくり出す。これらの力をもつている國家は、いづれの力が强いにしても、これらの力によつて平衡を保つているのである。ところがこれまでにもつていなかつた新しい事物・現象・環境に接すると、從來の慣習や統制力では理解や解決のできない問題が起つてくる。そして新しいものに對してこれまでのやり方が妥當しなくなれば、自己の價値觀や規準は役に立たないもの、無意味なものとなる。それは自己の均衡の破綻として感じられる。

われわれが自分とは違つたもの・新しいものに接し、それを攝取しようとするのは、自己の成長發展のためであるから、自己の能力で消化しなければならない。それにもかかわらずわれわれが消化しようとするもの・しなければならないものが消化されなければ、それは消化されないものが自分の働きを妨げていると感じられる。自分の能力が問題を解決するために必要な能力に對して劣つていても、問題がわれわれの働きを妨害していると考えられる。われわれは相手の責任にもとづいて問題が解決されないのだと判斷する。このように障碍物に衝き當ると抵抗が生れる。物理的な抵抗も、人間においては心理的な抵抗として感じられる。もちろん違つたもの・新しいもののすべてが消化しえないもの・攝取しえないものではない。容易に理解されるものがある。そのような問題は、物理的な抵抗・形式上の障碍物にとどまつて、心理化されないうちに解決される。また物理的な抵抗が心理化されるのに遠廻りをしたり、消化するために迂餘曲折を經るような場合もあるが、これは別に考えなければならない問題である。

國家はその意思を徹そう、要求を滿たそうとして自由であることを欲する。そのためには、自分のもつている基準・方法が用いられなければならない。それ以外に方法がない、自己のものは他のものに優先すると考えられる。しかし新しいものが自分のこれまでの方法では理解し解決することができないとすれば、抵抗をうけた、自由が妨げられたと感じられる。

その不自由に直面したとき、それを解決するためにどこまでも自分の方法を固持して、それによつて爲遂げようとする場合、排除する力が働くと新しいものを無視しよう・否定しようとする。自由であろうとするために、障碍物を避けて行こうとする。それは新しいものの攝取をやめることであつて、孤立化と衰退とを結果する。また自分の方法を棄てることによつて、抵抗から生ずる壓迫から逃れようとすると、新しいものの力が強ければ、われわれの自由は根元から奪われ、新しい力がわれわれの個性を消し去つてゆく。それは征服されるという結果に終るか、あるいは追隨するかに終る。

それでは自分の方法に固執して、しかも新しいものを攝取しようとする、すなわちひきつけようとする力が働き出すとどのような動きが生れてくるであろうか。もし新しいもの・他のものが、その力や意思が弱いか、あるいは共通性をもつたものならば、それを自己のなかに攝取し同化することができよう。このような場合の抵抗は物理的・形式

的である。力が共通性をもたないで、對等あるいはより強いものであると、そこに對立が生じ、抵抗は物理的から心理的なものになつてくる。獨自な民族性をもち、獨善的な國家意思を抱くものがぶつかり合うと、二つのものはひきよせようとする力をもつて働きかけながら、同時に排除しようとする力によつて阻外しようとする。二つの異つた文化が接觸した場合、それぞれが特殊な性質のものであると、それぞれは文化の發生發展した風土においてその民族・人種にとつて妥當するだけであつて、他の風土・民族には受け容れられない。このような二つの異つた文化は併存しえないか、あるいは混在することが可能ではあつても、融和して新しいものを創り出すことはできない。文化が併存しえないのは撥く力が働き合つているからであり、混在することができるのは二つの力が働いているからであり、また融和しえないのは排除する力の方がひきつける力よりも強く働きかけているからである。文化の接觸の問題はその生命力によつて決定される。ところが國家間における問題は、文化の生命力によつて決定されるのではない。民族性とそれから派生した現在の感情・心理、經濟的な理由、これらによつて形成され規定された國家意思が決定に關する最大のあるいは絶對的な支配權をもつているのである。文化が働くところとは別な面において、國家意思が、二つの力を統制するのである。

國家間において二つの力の相互の働きかけが起ると、自他の對立が生じてくる。それは國家意思の對立となつて現われる。國家意思は自己の自由や要求を完全に充していこうとする。自己を滿足させようとはするが、他の自由を考慮することはない。他の自由を制限し抑壓し否定しても、自己の滿足は國家の存立と繁榮のために充されなければならない。このために起る抵抗は、物理的な原因と心理的な原因とにもとづくものであるが、心理的な抵抗に一元化される。物理的と心理的との二つから生じた抵抗は、それらのいづれかを原因とした單一な抵抗よりも、その度合において強いものである。もし對立する國家間に心的あるいは物的な共通性が存するときには、抵抗は緩和されうる、すなわち妥協點の發見が可能ではある。

今日においても、國家意思が國家間の對立を生じさせる大きな原因であるが、對立を誘導してゆくものはイデオロギーである。しかもイデオロギーは、物理的な抵抗と一元化された心理的な抵抗を、再び物理的な抵抗から分離した。そのために、これまでの對立が利害における共通性あるいは類似點の發見によつて妥協なり和解なりの結果に終つた

のに對して、今日のあるいは今後の對立は、これまでのような心理的な抵抗を解消するための物質的な裏付の有無では解決することができなくなつた。物質的な保障を要求するとともに、それ以上に心的・思想的な對立の解消を強要する。また過去に見られたように、單に國家意思が滿足すれば、それで和解・妥協が決定されるといつたものではなくなつて、國家成員の全體意思が肯否を決定するようになる。それ故現在起つている對立は、二つの面の要求が同時に滿足しないかぎり解消することのない深刻なものであるために、その解決を一層困難にしている。

もともと國家意思は合理的な作用と、不合理な作用とをもつている。二つの力が合理的に働いているときには、抵抗面をなるべく小さく、對立する問題をできるだけ少くしようとして働く。この場合その國家意思は國家間の均衡を破るまいとする方向に働くのである。不合理に作用すると、國家および國家意思の內藏する矛盾が表面に現われてき、さらに他の國家との間の平衡を破る。すなわち二つの力の內におけると同時に外に對する調和的・協調的な働きがとまる。そのことによつて二つの力の働きかける對象が分岐し、分岐から生ずる矛盾によつて國家意思が決められる。均衡とは、合理的なものと不合理なものとの關係が、合理的なものによつて統制されている狀態である。それが內における不合理性と外に對する不合理性との對立によつて破られる。征服慾は二つの力の不合理な働から生れるものであり、侵略的行動はその身體的表現である。不合理な作用が表面に出てきた場合にも、合理的なものはつねに背後で働いている。力の正常な機能を回復し、不合理との平衡を取り戻そうとしてつねに働いている。對立によつて起る抵抗は物理的から心理的へと變つてゆくのであるが、物理的なものが合理的であるのに對して心理的なものは不合理的であるために、また力は本來不合理なものの表現であるために、不合理な作用は支配的となつてゆき、國家間の關係をもとへ戻そうとか現狀を惡化させまいとする合理的な働きを禁壓しようとする。このような不合理な働きは、均衡を保つていたときの合理に對する不合理なものではなく、均衡における合理・不合理の上に立つ不合理である。それであるから國家が自己の均衡すなわち國家意思の安全な遂行や國家間の關係の調整を取り戻そうとして合理性を求めようとするが、しかしこのときに求められる合理性は、いま支配的な力となつている不合理性に對する合理性ではない。求められる合理性が現實のものとなるためには、まずいまある不合理に對する合理性がなければならな

い。それ故國家が不合理な働きをしている場合にも合理性は要請されているのである。しかし對立しているのは、現在の不合理なものであつて合理的なものではない。對立の場面においては合理性が缺けているのである。

ここで要請される合理性は、現在の問題を解決するために求められているのであるから、どこまでも現在のものでなければならない。ところが現在あるところの合理性は、現在の對立を產み出した合理・不合理における合理性であり、また現在の對立が解決したときに出現する筈の理想としての合理性であつて、これは現在の合理と要請される合理性との上に立つ合理性である。一つは過去に屬するものであり、他は實現されていないものであるから未來に屬するものである。これらの二つの合理性はどのような意味においても、現在の不合理性と對立する合理性ではないのである。だが現在の對立を解決してゆくためには、また未來の秩序を產み出すためには、合理的なものと不合理的なものとが存しなければならない。それであるから現在においては合理的なものが存しないにもかかわらず、それが要請される。對立の時代にはそれを最も必要とするのである。

それではその合理性は如何にして求められるかというと、自國の意思・行動とその國際的な立場を肯定・正當化することによつてである。自己の不合理性が、客觀的にも不合理なものであつて、もそれは自己の自由の伸長であり、自己の秩序を維持するものとして合理的であると見られる。もし自己の不合理性を肯定するならば、自己の主張や行爲を否定しなければならない。それは他の不合理性を合理的なものとして認めることにほかならない。自己はあくまでも合理的なものでなければならないから、また自己の要求を滿し主張を徹さなければならないから、それを妨げるものは否定されるべきものとして不合理なものである。對立する國家意思は各々が自己を合理的とし、他を不合理とする。合理と不合理とからは高次の均衡が生れるが、不合理と不合理とからは反撥が起る。反撥は政治的段階において紛爭となり、實力が行使されて戰爭となる。またイデオロギーに原因し、それによつて導かれる今後の戰爭は、相手の徹底的な否定を目的として行われるであろうから、不合理なものとして措定されたものの人的・心的・物的資源の完全な破壞以外に解決の途はなくなるであろう。

自己の原理にもとづいて合理化された不合理性は、いつも他の不合理なものと對立するのではない。自己の不合理性の背後にかくれている合理的なものの働きによつて、他の不合理なものを通してその合理性を求めようとしてい

る。いわば靜かな對立によつて均衡を實現しようとしているのである。しかし直接に交渉をもつているものは、それぞれの不合理性であるから、對立は解決されない。この靜かな對立が不安定な狀態をつくる。

不安定な狀態においては合理的なものが働いているので、不合理との均衡を取り戻すことのできるものを、他のなかに見出そうとする。他のものを選擇する。ここで選ばなければならないのは、他の不合理なものではなく、どこまでも合理的なものである。二つのものの間に共通性が介在すると、それによつて選擇は容易で、二つのものの間の平衡は直ちに回復する。しかしそれを缺くと、無條件に他を許容・受容することができないから不安定な狀態が繼續される。それはひきつけようとする力と排除しようとする力とがそれぞれの原理にもとづいて働いている狀態である。選擇するためには選擇の規準がなければならない。この規準は合理的なものによつてつくられたものであるから、他の合理・不合理に對する自己の態度である。規準がたとえ對外的な心的・物的な利害にもとづいてつくられたとしても、自己の合理性の表現であるとみることができる。しかし合理性が支配しているときには、秩序と均衡はあつても發展は行われない。合理的なものは合理的であることによつて、かえつて合理性を失うものである。そのために合理性は自ら合理性を破ろうとする場合が起る。自己と對立するものをもつことによつて發展しようとするのである。それ故規準は固定的・不變的ではなくて、現實に伴つて變化するものであり、動的である。

しかし選擇の規準は、もともと不安定な狀態が惡化したり、決裂したりするのを防ごうとしてつくられたものであるために、他の不合理を合理的なものとして承認しなければならない、すなわち自己の合理性を否認しなければならないような事態に逢着すると、合理性の維持してきた合理と不合理との均衡が破れて、規準そのものが不合理なものとなる。不安定な狀態を不安定のままにして、しかもその狀態を安定したものと見做していた矛盾が露呈するのである。そして不安定な狀態に立ち到つても、この規準がなお働いている間は、對立は起つても紛爭を防止することができる。その働きが弱くなると、合理性は後退し、不合理と不合理との對立だけが殘つて、その對立が直ちに戰爭の段階へと導かれてゆく。選擇の規準とは、他の合理・不合理の自分の許すことのできる範圍である。それ故、たとえ相手が合理的であつても、それは自己にとつては不合理なものとなるのである。

三、

國家間の接觸交渉、生活圏の擴大が相對的な價値觀の衝突を惹き起し、そのためにさまざまな困難が起り、繁榮を望む人間をかえつて死滅に陷れるのであるならば、國家は外向的・對外的な一切の行動を止めて、それぞれの城塞のなかに再び籠ることによつて、自己の保全を守り、また他の平安を脅かすこともなく、各々の生活を享受することができるのではなかろうか。しかし人間が自己の所有を豐かにしようとし、よりよいものにしていこうとするためには他との關係、すなわち他を契機とする自己の否定的發展がなければならない。つねに他の存在を要請する。このことが現代の國家活動を國内で終結させないのである。他國家との關係は、單に科學・技術・コミュニケイションの發達によつて行われうるようになつたのではなく、むしろ國家が自己の否定的發展のために、科學・技術・コミュニケションを手段として發達させたのである。他國家との關係は歴史的な必然的な過程であり、國際社會の必須の條件である。それ故各國家が再び自己を閉鎖することは許されないことである。このことが自覺されるならば、當然各々の國家はそのための對策を構じなければならない筈である。

そのためにつくられたものが、さまざまな目的をもつて作られた國際的な機構である。この機構は自他の利益をともに保護し、平衡を保持することを目指している。それ故各國家はその機構のなかで同じ種類の、かつ平等の權利義務をもつことを前提として、そのことを承認してその成員となるのである。個々の國家は、國際的機構を一つの社會の單位と見、自己をそのなかの一つの地方として見なければならない。そして諸國家の參劃と贊成とによつて作られた國際社會の法則は、個々の國家の法に優越する最高のものとして、成員たる國家によつて遵守されるべきものである。要するに國家が自己の自由を制限し束縛するものの優先を承認するときに成立するのである。この法則は、個々の國家の意思が共同の福祉のために從屬することを要求するのであるから、國家間の對立あるいはその法則に背反するものがある場合には、個々の國家の意思・法の讓歩を要求する。最高の法則を實功あらしめるためには、個々の國家の利害に關する妥協と協調とがなければならない。もしこれに成員が服從しないのであれば、國際的な機構は成り立たないのである。

國際的な機構の成立は、それが發足するとき、國家にも個人にも多くの期待を抱かせ、理想社會の實現を約束するかのような錯覺を覺えさせ、永續性を確信させるのがつね

であつた。その目的と規定したことの實現は、成員たる國家によつて念願されたところであるのだから、各國家はそれを支持し、自國の利害を超えてその機能を助けなければならない筈である。

ところが各國家は、それぞれが主權的な組織體であるために、自己の意思以外のどのような意思によつても拘束されようとしないし、またそれぞれがその主權の性格や所在を異にし、國家組織の方法と形態に違いがある。一方では國際的な機構によつて國家間の均衡を調整し維持しようと企圖しながら、他方ではそれと同時に自己の自由を無限に擴大しようとする。國際的な機構は、成員が自己の欲望を制禦することによつて相互の發展を圖るためのものであるよりは、成員が互に性質の違つた自由の衝突を起すことなく、合理的により多くのものを獲得するための手段として組織されるのである。少くともこのような意味ででも國際的な機構が尊重されている間は、國家間の對立を妥協と協調に導くために、何らかの役割を擔つているであろう。その間は國際的な機構はある國家の合理性と他の國家の合理性とを結びつける仲介をしているのであるが、國際的な機構の成立・効力は成員の合理性を制限することによつて可能であるので、各國家のなかでの合理・不合理の均衡が國際的な機構を媒介として破れると、國際的な機構が多様性の上に支えられているために、統一することのできないものを統一していたことから生起する矛盾を露わにする。國家は自己の意思を殺すために參加しているのではなく、自己の利益の保障をうるために加盟しているのであるから、その保障がえられないならばそのような機構を必要としなくなる。そのため國家の不合理性は國際的な機構の存在理由を否定するのである。そうなると國際的な機構は國家間の不合理なものの對立を和解させるための仲介者としての實効をもたないものとなつてしまう。

國際的な機構は、國家の世界的地位の認識と相俟つて、いろいろな意味で國家間の相互の交流・理解を促進するのに貢献してきた。諸國家は、自國について知ると同樣に、世界について他國家についての知識を豐かにもつようになつた。しかしコミュニケイションは必ずしもつねに正確な知識をもたらしはしない。われわれが他についての正確な知識と不正確なあるいは不當な知識をもつたということは、他との對立が惹起したときに、無知の狀態での對立よりもその對立をより烈しいものにする原因となる。他について無知のままでの對立は、單なる物理的な軋轢であつて、所有權の爭奪によつて終るが、他について熟知している場

合には必然的に心理的な抵抗へと移つて行く。それ故に心理的な理由から起つた戰爭は心理的な抵抗の前提である物的資源の壞滅を企てて、將來再び心理的な抵抗を發生させる心的・物的な基盤を覆えそうとする。

國際的な機構の發達に對して、われわれは無條件に樂觀的ではいられない。それが有効である間は、表面に現われた統制力とそれがもたらす秩序に信頼して平和を享受することができるが、その機構の內部に含まれている矛盾が露呈すると法の拘束力が失われ、これまで裏面に潜んでいた消極的な相互の理解が國家間の離間を擴大する。しかも國際的な交流が結果としては戰線を昔よりも一層擴大し、戰う方法をより苛烈にする。

物理的・心理的な抵抗の發生に伴う均衡の破綻と價値の變動は、それが物理現象であれ心理現象であれ、危機として把えられる。人と人あるいは國家と國家とが物・心の媒介によつて結ばれるときに社會あるいは國際社會を構成するのであるならば、社會狀態もまた抵抗によつて危機に陷るのである。

危機は缺乏の狀態とか壓迫されている狀態とか不安定な狀態とか、あるいはそれらにもとづいた險惡な狀態とかを意味しているのであるが、このような危機は受動的・消極的な危機であるにすぎない。自己を否定しようとする他に對して、自己の存在・行爲の承認を迫つて働きかけるときに起る狀態である。それ故危機そのものは、安定でも不安定でもない狀態であるともいえる。しかしその狀態が人あるいは國家の存在を新たに規定し、これまでの均衡を破り、遂には死活を制するに至るものであるために、われわれはわれわれを脅すものとして感取する。それであるから、われわれは危機という言葉から不安と恐怖とを感じるのである。

危機が社會のある狀態を意味しているのであるならば、今日の社會には、國內における危機と世界における危機との大小二つの圈における危機がある。しかも危機の構造の二重性は、異つた二つのものの重複ではない。今日の社會の二つの危機は相互に關連しており、切り離すことのできない關係をもつている。國際社會が多くの國家の單なる集合體でないように、世界の危機は諸國家における危機の單なる集合物ではなく、多樣な危機が相互に入り交つたところに起つてきたものである。國家における危機の急迫は、世界の危機を大きくし、そのことによつて國家の危機は一層緊迫する。また一つの危機が危機の狀態でとどまつていることができるのは、たとえその危機がどんなに切迫したものであつても、自他の合理・不合理の均衡によつて持ちこ

たえられているからである。自己における危機を克服するために他との關連における危機から免れようとすれば、そのことはかえつて國内の危機と世界の危機とを一層險しいものにする。また諸國家の危機とは別個に世界の危機の解消を圖るならば、諸國家の危機はより深刻化する。

世界の危機は、有限な世界のなかで諸國家が無限の自由を欲求するところから起つてくる。その自由とは、地理的領域の擴張、物質量の增加、あるいは思想的な支配のいづれのものであるにしても、國家意思が空間的に擴大され浸透してゆくことと、それらのことについて抵抗が皆無になることを意味している。それぞれの國家意思が自由の伸張を圖るならば、有限な世界において抵觸することは必然なのである。

危機は空間における國家意思の自然發生的な物理的な抵抗を原因として起るだけではない。國家は、自己のなかにある矛盾・不安・對立を何らかの方法によつて解決しなければならないし、解決しようとする。その諸問題を自己のなかで解決することは、自己そのものを否定することにほかならない。そのようなことは國内に一時的にでも、紛糾・混亂・動搖をきたす原因となる。それ故自己の内部において自己の方法によつて自己の問題を解決するのを避ける。しかも内部の不合理なものを拂拭してゆくために、それを外に出して、外において、他のものとの關係によつてなそうとする。それ故國家意思の不合理性は、自己のなかから起つたものではなく、外にあるもの、他のものによつて誘致されたものであるとして、その原因も責任も他の不合理性に轉嫁される。他が存在するということが自己の矛盾を生じさせる動機なのである。たとえ客觀的に不合理と認められるものではあつても、自己の意思は合理的でなければならないが故に、他のものの意思は否定されるべきものであると考えられる。その故自己に對立するものを取り除くことが、内と外との矛盾を解決するための唯一の手段として採られる。危機は自然發生的であるとともに、より作爲的である。

（未　完）